

また、かかる社会的現状を認識される一方で、『開目抄』(五五六頁)等に示されるように、聖人御自身も久遠の過去以来の宗教遍歴において謗法罪を犯してきたことを深く反省されたのである。

ところで、親鸞聖人の罪認識は「機の深信」に基づいて個々の人間性における罪惡を徹底的に内省するものであった。これに対して日蓮聖人における罪とは、直ちに仏陀釈尊への背反を意味し、無批判的で安易な仏法受容のあり方に対して反省を促すものであったといえる。

以上のように考えてくると、日蓮聖人の宗教を現代において追求し、継承しようとする我々は、対外的に謗法の存在を糾弾すると同時に、内面的にも自己の信仰のあり方を厳しく律することが要請されている点に十分留意する必要がある。つまり我々は、謗法罪の問題を、単なる排他理論というような皮相的理解に留まることなく、むしろ信仰主体における自己内省という角度から再認識しなければならない、と考えるのである。

『本尊聖教録』の記載内容 について

寺尾英智

『本尊聖教録』は、鎌倉末・南北朝時代における本尊・聖教等の総合目録として、当時の教団を考察する上で重要な資料の一つであり、『日蓮聖人御真蹟対照記』『日蓮宗宗学全書・上聖部』等に所収されている。しかし、本書の諸刊本については、原本の体裁を正確に伝えていない等の問題点が指摘されている。そこで、本書について書誌的考察を加えることは、意義の存することと考へ、一、二の点について報告するものである。

『本尊聖教録』一冊の原本は、現在、中山法華経寺聖教殿に所蔵されている。その体裁は、大略次の通りである。袋綴、表紙一丁、本文五十丁(うち白紙七丁)。さらに、正保三年(一六四六)に行なわれた修補によると考えられる修補表紙の付加、料紙の裏打がされている。本書には、前述の正保の修補の時に行ったと考えられる錯簡が存在する。この錯簡は、二丁、三丁に見られる。

各丁の表と裏が、その位置を交換してしまっている。即ち、現在の一丁裏・二丁表・二丁裏・三丁表・三丁裏・四丁表という次第は、本来は一丁裏・二丁裏・二丁表・三丁裏・三丁表・四丁表という順序であったと考えられる。これは、本書の原装釘の綴穴の位置、及び二丁・三丁の前後に通して見られる虫喰の位置が、それぞれ前後の丁における位置と異なることから判明したものである。そして、この様に、一丁においてその表と裏の各半丁が入替るためには、料紙の折目の部分で切離されていることが必要であるから、料紙に裏打がなされた時点であると考えられる。

次に、錯簡の部分の記載内容について述べよう。一丁、二丁は目録が記されているが、一丁は一箱から三十一箱まで、二丁表は白紙、二丁裏は三十二箱から三十五箱までと次第している。従って、二丁における錯簡は、三十一箱と三十二箱の記載にはさまれた白紙が、三十五箱の記載の後へ移動するのみで、全体の記載上には、大きな影響を及ぼさない。三丁は、四丁へと続く本妙・法華両寺の本尊・仏画等を記載した部分である。三丁表は、日蓮聖人自筆大曼茶羅八幅及び板本尊一体、三丁裏は、内題以下法華寺分の本尊等、四丁は、日高筆大曼茶羅一幅

をはじめ本妙寺分の本尊等が記されている。ここで、三丁の錯簡を訂正すると、以下の如くである。即ち、まず、内題以下法華寺分の本尊等、次に日蓮聖人自筆大曼茶羅八幅及び板本尊一体、そして本妙寺分本尊等へと続くことになる。今まで、法華寺分とも本妙寺分とも明らかでなかった日蓮聖人自筆大曼茶羅等が、これにより本妙寺分であったことが明らかになる。ところで、以上の八幅の大曼茶羅には、最初の二幅にそれぞれ「乘明当身給」「太田尼経女当身給」と注記がある。これらの注記によれば、太田氏↓日高↓本妙寺への伝来が予想されるのであり、前述の如く三丁裏記載の大曼茶羅等が本妙寺分であることを裏付けよう。

次に、所々に見られる追記について述べる。本書に見られる追記は、次の様に分類できよう。(一)本書作成後、校閲時になされたと思われるもの。(二)作成後の所蔵の増加によってなされたもの。(三)記載の本尊・聖教等の授与、貸借等によってなされたもの。(四)記載の聖教等の収納箱の変更、保管場所等の変更にもないなされたもの。以上の様な追記の存することは、本書が当時、日常的に使用されていたことを明らかにしていると考えられる。また、これらの追記を明らかにすることは、本書の内容を

正しく理解するためにも必要であらう。

以上、若冠の点について『本尊聖教録』について述べた。本書は、はじめにも述べた様に、刊本に問題点が存するのであり、利用にあたっては、以上のような点に注意しなければならない。尚、今後は、本書記載の書目の検討等を行なっていきたい。

附記 本発表にあたり、立正大学教授中尾堯博士より、資料の提供、また種々御教授を受けた。記して感謝する次第である。

宗門の現状と課題

——五十五年度宗勢調査報告から——

久 住 謙 是

昭和五十五年度の日蓮宗宗勢調査は、四年ごとに行う第三回目である。宗勢調査報告にもとづく概算的な指摘であるが、問題の所在の一端を述べておきたい。

寺院・教会・結社を総括して寺院と呼称することとし、宗門は五二二六ヵ寺（昭和五十五年四月）が、それ

ぞれ、どのような現状に置かれ、伝道教団をめざす宗門寺院として、どのような課題が提起されているのであるか。

今日の日本は、はげしい社会変動にゆれ動き、切実な生活への不安は増大し、思想や精神のありようにも多様な変化をもたらし、昭和三十年来以降、都市化は一層すすみ、従来の家は崩壊し、核家族化の様相が拡大されている。いかなる宗教集団も、こうした社会的現実と無縁ではなく、日蓮宗もまた疎外と断絶、不安と危機にうずまく現代に存在し、さまざまな社会変動に直面している。社会の推移と、それにとまなう人間の意識の変化は、寺檀関係の変化をもたらし、寺院護持・教化方策の転換を余儀なくさせ、現代に生きた寺院活動への対応を迫まられている現状である。

宗門の寺院数は、仏教各宗派中五位にランクされている。一カ寺平均の檀家数は百八戸、百戸以内の檀家数を有する寺院は、全体の六割に達する。第一次産業地帯に属する寺院は五三%、第二次、三次産業地帯が四五%、前回調査より、都市域寺院が増加し都市化現象を反映している。とくに、太平洋ベルト地帯とその周辺に宗門寺院が多く、寺院総数の過半数が集中し、宗祖および直弟